留学生通信 69 号
一般社団法人 全国日本語学校連合会
2017 年 4 月 3 日

今、改めて「留学生」とはどのような存在なのであろうか

★　留学生が学ばなければならない「文化と習慣」

「卒業したら、母国と日本の懸け橋になって両国の発展と友好のために……」

日本語学校の卒業式でよく耳にする言葉だ。日本語学校を卒業した生徒たちは、進学と就職とに分かれる。進学して、日本の大学や大学院で専門的なことを学びながら、日本の文化や言語を学んでもらいたいという思いもあるし、また、就職して一足早く、日本の企業文化や実践を通じての技能を身に着けて、日本企業や母国における日本企業の大きな柱として活躍をしてもらいたいと思う気持ちもある。いずれにしても、卒業後、それぞれの道で頑張ってもらいたいと思うのは、どこでも同じではないだろうか。

一方、卒業があれば、入学がある。新入学といっても、普通の学校とは異なり日本語学校の生徒は、諸外国から日本に希望と不安を胸にやってくるだけではなく、言葉も通じないし、知り合いもほとんどいない日本にやってきて一人で生活を始めるのであるから、その部分のフォローが大変である。中にはホームシックにかかったり、あるいは、すぐに母国に帰ってしまったりする生徒もいるが、そのような思いと戦いながらも、日本で「日本語」を学ぶということを目指し、そして、その「日本語」を生かした将来を思い描いて頑張ってほしいものである。

さて、ここまで来て思うのであるが、「留学生」とは一体何なのであろうか。先日は JaLSA で、新規に学校を開校する皆さんの講習会も行われたが、そもそも「留学」とか「留学生」ということについて、真剣に考えてみようと思う。日本語学校では４月だけではなく、一年に複数回新年度の開始があるが、一般的に日本ではこの４月が新年度の始まる月であることから、そのことを改めて考えてみたい。

さて、まず留学生を辞書で引いてみよう。

「外国に滞在して学術・技術などを学ぶ学生」（大辞泉）

とある。

では、外国に滞在して学ぶものは「学術」や「技術」だけであろうか。そもそも「学術」や「技術」というのは、その国や地域において特有の発想があり、その発想に地域の文化を組み合わせてできるものである。例えば、同じ陶器を焼く技術があった

としても、その色合いや形などは、「九谷焼」と「信楽焼」では全く異なる。土の質や色の付け方などもあれば、窯のある環境やその近くの植物などからできる染料によって、特徴のある焼き物ができるのである。そのように考えれば「その土地の習慣や文化、風土などを取得しなければ、学術や技術が完全には理解できない場合がある」ということになる。単純に学術や技術だけならば、翻訳したものを読めば足りるかもしれない。しかし、「習得する」ということになれば、やはり文化や環境の部分を学ばなければ完全に習得できない部分があるのだ。

★　文化の違いからくる「摩擦」

逆に、「文化や習慣が違う」ということはどのようなことなのであろうか。

「文化が異なる」ということは、そのまま「自分が今までやっていたことが通用しなくなる」ということに等しい。今まで留学生自身が母国で行っていた習慣や文化が、日本に来たら全く役に立たなくなってしまうということに他ならない。もちろん、すべてが否定されるわけではない。人間と人間の触れ合いや喜怒哀楽という感情に関しては、世界共通である。しかし、そうでない部分も少なくないのである。

そのような場合というのは、自分の日常や常識を否定されてしまったような感じになってしまう。当然に、「自分の今までしてきたことは何なのか」というようなことを考えてしまう場合も少なくないのである。

このような心の隙間ができた時、日本語学校の先生たちが、毎日生徒を見ていて気付いてあげられればよいのであるが、そうでない場合、留学生の多くが犯罪に手を染めてしまう場合が少なくないのである。もちろん、本人の弱さや、目標意識の希薄さなど、本人の問題もあれば、周囲の協力体制の問題もある。しかし、環境が変わったことに関する不安や寂しさなどをいかに周囲がくみ取れるかということが大きな問題になるのではないだろうか。

日本語学校では、当然に「文化」を教える。日本だけではないが、日本には特有の挨拶の文化がある。中東ではあまり見ることはないが、皆がそろってから「おはようございます」等、挨拶をしてから授業を始めるスタイルは世界でも珍しく、同時に世界から称賛されている文化である。昨今ではサウジアラビアで国が奨励してその方法を取り入れている。みんなで掃除をしたり、みんなでそろって何かをするということも、日本特有である。これらの文化を学ぶことが、そのまま仲間意識や連帯感を作り、その中で企業文化ができてくる。逆に、毎日そろって何かをすることで、生徒の問題や心の動きなどを読み取ることができる時もあるのだ。

逆に、このような機会に、うまくその文化の違いを克服できないと、ついつい、「甘い方向」に向かってしまうことがある。つまり、犯罪に走ってしまうということである。

留学生が犯罪を行ってしまう背景には様々なものがあり、この「留学生通信」でも、今後その内容に関してしっかりと見てゆくことにするが、しかし、一つ分かっているのは、「本人」「周辺の環境」「経済的問題」「文化の違い」など様々なことが原因としてあげられる点だ。そして、いわゆる万引きといわれる「窃盗犯」や「不法就労」というような経済犯罪が多いようであるが、それ以外にも様々な犯罪を行ってしまうようになってしまうことがあるということだ。

埼玉県警察署の外国人のポスターには、「甘い話には罠（犯罪）が潜んでいます！！」と大きく書かれている。だが実際に、犯罪に手を染めてしまう留学生の多くが「生活苦」から甘い話に乗って犯罪グループに入ってしまい、その犯罪グループから抜けられなくなってしまうというようなことが報告されている。

留学生は、法務省の許可を得れば、週に 28 時間働ける。しかし、この制限の下で「月 20 万円」稼ぐには、単純計算で時給 1800 円程度の仕事に就かなければならないが、そうした仕事を見つけるのは難しい。そのような中で勉強も行い、なおかつ留学費用も払い、そしてたまに母国に帰る交通費も稼ぐとなれば、甘い話に乗ってしまうことも少なくないのである。本来は、そのようにならないようにしなければならないのであるが、現状では難しいところも少なくないのである。これらは、単純な窃盗だけではなく、サイバー犯罪や振り込め詐欺などの場合もあり、犯罪の多様化が大きな問題になっている。

一方、日本の企業側にも問題がある。昨今、新聞紙上をにぎわせているのが「留学生を強制的に労働させた」というような犯罪である。「安価な労働力として留学生を見ている」という部分に加え、「日本における労働現場の人手不足」ということもあるのだ。東京オリンピックに東日本大震災や熊本地震の復興など、日本は工事現場が非常に多いのに対して、少子化と高学歴化によって、労働力が足りない状態であることが挙げられる。また、そのような工事現場での労働が多いということは、「食事」といった付帯事業においても、労働力が少なくなっているということを意味しているのである。この時に、「留学生や技能実習生を安価な労働力」としてしか見ない場合、日本側企業に問題が生じていることがある。

他にも、政府の問題がある。政府においては、問題は二つあると考えられる。一つは、現場を無視した「１週間 28 時間というアルバイト制限」である。これは、「勉学で来ているのだから、それくらいしか働けないはずである」というような感覚があるのと同時に、「日本語学校の現場は、生徒をしっかりと管理できず、勉強よりもアルバイトを優先させてしまう恐れがある」というような、現場への信頼感の欠如がある。これは、やはり過去にそのような事件があった結果であるが、同時に、現在の学校側と政府側の交流が不足していることの一つの表れではないかと考えられる。

もう一つの問題は「日本の犯罪者データベースと母国の犯罪者データベースがリンクしていない」ということである。要するに、「日本で犯罪をしても、母国に逃げ

てしまえば前科がつかなくて済んでしまう」ということが大きな問題になっている。そのために「旅の恥はかき捨て」ではないが、犯罪を行った結果が「日本にいられなくなるだけ」というような状況になってしまう。もちろん、そのことも本人や家族にとっては非常に大きな問題なのかもしれないが、しかし、母国で犯罪を行う場合よりもはるかに軽い状況になってしまっているのである。

★　そもそも留学生の目的と犯罪の抑止

「留学生の犯罪」ということを書くと、もっと様々なことを書かなければならなくなってしまう。留学生が犯罪に巻き込まれてしまう可能性はそれだけ大きいし、また、その危険性は非常に大きなものである。しかし、それは留学生に限ったことではない。実際に、日本人であっても犯罪を行ってしまう人はいるわけであり、そのことを考えれば、留学生だけを特別視する必要はない。留学生であることから特別に規制されていること、例えば「オーバーステイ」や「在留資格証不携帯」などは十分に注意しなければならず、他にも、日本にいることによって「文化の違い」や「さみしさ」から、犯罪グループに入ってしまうということを避けなければならない。しかしそれ以外は日本人の教育機関と同じであると考えるべきではないか。

日本人も留学生も同じ、ということは、基本的に学校や教員・学校職員との信頼関係があるか、ということが最も大きな問題になってくる。文化の違いを感じるのは仕方がないし、文化や言語の違いがあるから、冒頭に書いたように「懸け橋としての期待」が高まるのである。日本と母国の両方を理解するということが留学生にとって将来の最大の強みであり、その強みをどのように生かしてゆくのか、ということをしっかりと考えなければならない。その留学生に対する接し方や、留学生に対する愛情のかけ方によって、彼らの将来は全く異なるといって過言ではないのではないか。

留学生であることは、「特別に考えなければならないこと」と「日本人と同じで考えなければならないこと」の二つの側面がある。日本人から考えれば驚くようなことを、常識と思ってやってしまうこともある。しかし、それらのことを教え、日本を理解させることが最も重要なのではないか。

最も効果的な犯罪の防止は、留学生を「一人前に扱うこと」と「信用し期待すること」、そして「日本を理解させること」である。その「日本の文化への理解」が少ないこと以外は、留学生も日本人も全く同じである。そのために、時には厳しく、時には優しく、留学生に接することが最も重要なのではないか。

そのうえで、留学生を受け入れ、日本を理解させるだけの「環境」を整えることが最も重要である。これは、日本語学校だけが行うことではなく、政府、地方自治体、専門学校や大学、そしてアルバイトを受け入れる企業などが連携して行わなければ

ならないことである。そのことを今後も研究し、時代に合わせた対応ができるようにしてゆかなければならないのではないか。

　全ては、日本と、彼らの母国の発展のために。